

ISSN 1344-5162

ぶらたなす

第 59 号

「図書館での効果的な展示
- その理論と実際」



©馬場のぼる

平成 22 年 3 月

東京都立多摩図書館

はじめに

都立多摩図書館児童青少年資料係では、平成 21 年 12 月 10 日と 22 年 1 月 12 日の 2 日間にわたり、都内公共図書館の児童サービス担当者を対象に、「図書館での効果的な展示」の研修を開催しました。講師の服部比呂美氏は、図書館における展示の理念と実務について、豊富な経験を交えながらお話をくださいました。受講生たちは、講師の知識や技術だけでなく、そのお人柄にも触れ、熱心に課題に取り組み、資料や展示への思いを新たにすることができました。

このときの講義を中心に、図書館における展示について、服部比呂美氏にご執筆いただきました。今後、図書館での展示に取り組む際には、是非ご活用ください。

服部比呂美氏プロフィール

國學院大學大学院博士課程後期修了。博士（民俗学）。国立文化財機構東京文化財研究所無形文化遺産部客員研究員。国立国会図書館国際子ども図書館調査員を経て、現在白根記念渋谷区郷土博物館・文学館学芸員。著作『子ども集団と民俗社会』（岩田書院 2010）

目 次

はじめに	・・・ 4
1 展示の機能と目的	・・・ 6
2 展示に至るまでのプロセス	・・・ 7
調査について	・・・ 7
「資料調査カード」	・・・ 9
展示企画の立案	・・・ 10
企画書の作成	・・・ 11
実例：「特別展 本にえがかれた子どもたち - 町の子ども・村の子ども」	・・・ 12
資料の配置図と配布物の作成	・・・ 16
資料の設置	・・・ 16
館内での展示周知	・・・ 18
展示を媒体とした事業展開	・・・ 19
3 課題 展示企画立案と配置の実践	・・・ 19
受講者の展示企画一覧表	・・・ 21
企画案の実例	
「『ちいさいおうち』と『小さな家シリーズ』展（仮称）	・・・ 26
町田市立図書館 田中幸枝	
「この人も調布人！児童文学作家小沢正さん」展（仮称）	・・・ 28
調布市立図書館 吉江夏子	
「ホネホネホネ」展（仮称）	・・・ 30
葛飾区立鎌倉図書館 山川範子	
「ミノムシ」展（仮称）	・・・ 32
東村山市立中央図書館 奥田美文	
おわりに	・・・ 34
参考文献	・・・ 35

図書館での効果的展示-その理念と実際-

白根記念渋谷区郷土博物館・文学館

学芸員 服部 比呂美

はじめに

本稿は、東京都立多摩図書館での講座内容を振り返り、図書館における資料展示の必要性についてまとめたものである。

本題に入る前に、筆者と児童書とのエピソードを紹介しておきたい。

それは昭和 40 年代にさかのぼる。そのころ、筆者の出身地である静岡県沼津市は、高度経済成長の中で大きく姿を変えていた。特に沼津駅の北側に位置する農村地帯では、どこまでも続いていた畑の中に東名高速道路が貫通し、東海道新幹線のための高架橋が建てられるなど、その様相は急速に変わっていった。しかし、こうした中でもそれまでの生活習慣がすぐに変わるということにはなかった。盆や正月の行事は家々で丁寧に行われていたし、子どもたちは春には畦で芹を摘み、夏にはクワガタを捕りに行くなど、家の中にいる時間よりも外で遊ぶ時間の方がずっと長かった。

入学したばかりの小学校では、教室ごとに学級文庫があり、主に「岩波の子どもの本」が並んでいた。今考えれば贅沢な話である。筆者はここで、運命の本となる『やまのこどもたち』（石井桃子文 深沢紅子絵 岩波書店 1956）に出会った。表紙には、紙のカバーがかかっている、ここに櫛を曳いた男児と嬉しそうに跳ねる犬が描かれている。この男児が主人公のたけちゃん、一緒にいるのは飼い犬のジョンであった。本の中にはたけちゃんをはじめ、自分と同年代の子どもたちが何人も登場する。たけちゃんが暮らしている農村の風景は、自分が暮らす環境とほぼ一致していたが、冬の場面では見たことのない雪国の暮らしが描かれていた。

それまでも本を読んだことがなかったわけではない。しかし、家にあった本は日本の神話類が多く、子ども心にもその内容は絵空事のように感じていた。しかし『やまのこどもたち』の中には等身大の自分がいたのである。そこにまず惹き込まれた。同時に、自分とは異なる環境に生きる子どもが日本にいることを、現実味をもって感じられ、この本に夢

中になった。

その続編ともなる『やまのたけちゃん』(1959)では、たけちゃんの名前が「すがわらたけお」であることもわかり、たけちゃんに手紙を書いた。「今度おちばはきに連れて行ってください」というような内容だったと思う。

私の記憶に間違いがあるかもしれないが、これらの本は、時代と本の内容が合わなくなったという理由で一度絶版になり、昭和60年頃には購入できなかった。上京して大学生となった筆者は、帰省するたびに故郷の風景が変わってゆくことに胸が締め付けられるような痛みを感じるようになっていた。しかし、地元ではそれが経済発展として受け入れられていた。余計な口を挟む余地はなかった。その時、故郷の風景を留めた『やまのこどもたち』が胸に強く迫ってきた。だからこそ、平成を迎え、この2冊が、再度店頭に並ぶようになった時の喜びはたとえようもなかった。

あれから、いつ絶版になっても大丈夫なように、これらの本を何冊も購入した。そして今、筆者が民俗学を専門としているのも、この本との出会い、たけちゃんの住む場所を知りたいと思ったことが大きな動機であったと思う。子ども時代に出会う本の影響力は計り知れないことを、筆者は身をもって体験した。もしも学級文庫にこの本が置かれていなかったら、たけちゃんとは一生出会うことはなかったかもしれない。ずっと後に出会っていたら、あの時と同じ感動は受けなかったかもしれない。

前置きが長くなったが、本の展示に求めることは、実はこうした本との出会いなのである。1年にいったい何冊の本が出版されているだろうか。これまでに何冊の本が世の中に送り出されているだろうか。いずれにしろ途方もない数字であることは間違いがないが、個人がこうした本と出会う機会には限りがある。現在では、ベストセラーの本を置かなければならないのは、公共図書館の宿命のようになってしまっている。しかし、出版物を扱うプロとして、埋もれた宝のような本を掘り起こし、客観的な評価を行い、展示で利用者に紹介する仕事は、図書館員冥利に尽きるものではなかるうか。

そうは言うものの、こうした感覚論では、1円の予算も計上されないのが行政である。予算云々以前に、本を展示するために、まずは目前の上司をいかに説得するかという課題もある。こうした問題に対処するた

めにも、展示ということ論理的に把握し、その目的を明確化しておくことが必要であろう

1 展示の機能と目的

昨今、図書館で資料展示が役割の一つとされる傾向にある。実際、公共図書館の入り口に1、2台のガラスケースが置かれ、図書や雑誌が並べられているのをしばしば見かける。時には、単に本を並べているに過ぎないものが「展示」と称されていることもある。

ところで博物館では、なぜ予算を計上して資料を収集し、温湿度管理の行き届いた建物の中に入れて保管し、展示で資料を公開しなければならないのだろう。大きな目的として、それらが歴史を証明するものであることがあげられる。歴史を証明するものの存在は、国家そのものの存在に関わる大きな問題で、歴史の教科書が国際的に取り沙汰されていることにも顕著である。

郷土に根ざした博物館であれば、郷土に関する歴史や地理など、地域に関する総合的な資料収集を心がけているはずである。窓口はこの地域のことを知りたいという利用者があった場合、その問いかけに十分に答えられる博物館であることが理想である。こうした資料収集の維持は、現在の社会システムで見てゆく限り、個人では不可能で、なんらかの組織的対応が必要である。地域文化の向上とか、国民文化の向上という目的を考えると、これは行政主導で為すべきことであろう。

歴史を証明する資料には、文字・文化財・民具などさまざまな資料があるが、博物館ではこうした収集資料を利用者に提供する役目がある。こうした役目から明らかなように、博物館は利用者のために存在する。そして、利用者の知的好奇心を満たし、さらに利用者の教養を育むための「支援機関」であることが望ましい。「施設」ではなく「機関」というのは、博物館が博物館員と利用者とは相互に協力して作り上げる場所であることを意味する。

博物館の機能には、基礎機能（一次機能）として、資料の収集・保存保管・調査・研究があり、活用機能（第二次機能）として教育普及がある。展示はここに位置づけられる。つまり、教育活動が無ければ、利用者にとっては何のために集めたのかということになる。現在では少なくとも、かつては部屋の片隅に、発掘された遺物や寄贈をうけた民具

が、何年も同じ状態で置かれている博物館が少なくなかった。こうした場所では、利用者は新たな発見はないと判断し、何度も足は運ばない。存在意義を失った博物館は、予算の縮小とともに閉館に追い込まれることもある。博物館は、珍しいものを「見せてやろう」という姿勢から出発したが、閉館に至った博物館は、厳しい言い方をするなら、このような姿勢から脱却していなかったともいえる。

図書館は、博物館よりも早い段階で利用者のニーズに応える努力をしてきたように思われる。しかし、図書館が本の専門家を育てる環境を放棄し、購入資料は利用者の要求に傾き、資料廃棄も機械的に行われがちになって以降、図書館は大型貸本屋かという批判も出てきた。博物館や図書館は利用者あっての存在ではあるが、利用者にとって都合の良い無料サービス提供所ではない。利用者には、こうした機関が本来持っていた意義や思想を理解して貰う必要がある。資料は単なる「モノ」ではなく、生きるための知恵や人類の英知を内包しているものだからである。

展示は利用者にとって、より良い人生を送る手助けとなるものであると同時に、博物館や図書館にとっては設立理念が主張できる場であることを期待したい。

2 展示に至るまでのプロセス

調査について

前項で述べたように、博物館の展示の目的は、収集した資料を綿密に調査研究して、その資料価値を利用者に提供することにある。これは、図書館における展示にあってもなんなら変わらない。

まずは資料を知り、資料の価値を把握することである。博物館では、国宝や重要文化財に指定されている資料のように、その価値が社会的に位置づけられているものもある。しかし、図書館にはこうした性格を持たない資料の方が圧倒的に多い。そのため、調査研究によって、この資料しか持ち得ないような価値を発見するのが、図書館員の大きな仕事になる。本は表紙を見るだけでは内容はわからない。図書館員は、自ら語ることはない本と向き合い、その発する声を聞き取り、利用者に伝達することを意識してほしい。

例えば、文学が、言語によって示された人間の思想、感情の表現であ

ると定義するならば、読み継がれてゆく作品は、人生観や人間研究が書かれたものであるといえよう。文学の中には、自然主義文学のように、ある時代には熱狂的に支持されたが、現在では出版されなくなってしまったものもある。一方で、『万葉集』、『源氏物語』、『徒然草』といった古典は現代人にも受け入れられている。古典には、時代ごとに新たな解釈が加えられるという底力があり、それが作品を普遍的なものにしてゆくといえよう。

児童文学も例外ではない。たとえば昔話の息の長さはどうであろう。「桃太郎」は玉石混淆ながら、現在でも何冊もの絵本が出版されている。また、「一寸法師」や「浦島太郎」は、江戸中期に大坂で出版された「渋川版 御伽草子」にはすでに収録され、こうした物語群の成立は、室町後期にさかのぼるといわれている。

筆者が、国立国会図書館国際子ども図書館で展示業務に携わっていた頃、いわゆる本格昔話を主題とする展示を企画した。本格昔話とは、人の生涯を表現した昔話である。主人公は常人とは異なる出生をし、与えられた課題を果たす旅に出る。援助者の助けを借りて課題を果たし、富や良き伴侶を得るといった大団円を迎える。多くの場合、主人公は世の中に「往きて」、課題を果たした後、ふるさとに「還る」。この構成は、世界の昔話に共通している。そればかりではなく、読み継がれている児童文学は、こうした構成にのっとりて物語が展開していることが多い。アンデルセンの『親指姫』や『雪の女王』など、多くの往きて還りし物語はこれに当てはまる。主人公が子どもである児童文学では、結末で約束されるのは富や伴侶ではない。未来を生きる子どもにとって、欠くことのできない「成長」である。この点が昔話とは異なるが、長く読み継がれる児童文学は、出生・試練・援助者の登場・大団円という昔話と相似型の構成をもつ。この展示の趣旨は予想以上に理解され、展示と同時に開催された国際シンポジウムでは他国の児童文学研究者からも共感を得た。

このように、展示では、資料を通じて利用者との間にコミュニケーションを成立させることも可能となる。ただし、時代は高学歴社会を迎えている。利用者が求めるハードルがより高くなっていることを意識し、資料と向き合うよう努めなければならない。

調査した内容は、記録しておかなければ消滅してしまう。本講座では、

資料調査カード				No.			
分類番号	請求記号	収蔵番号	収蔵場所	展示場所	展示資料No.	展示期間	返却日
図書・雑誌							
資料名			資料形態	資料画像			
		数量:	実物・複製 模型・模造 図解・写真				
シリーズ名			その他()				
著者			版權				
生没年			要・不要				
画家			有料・無料				
生没年			その他()				
出版者				展示箇所と理由			
発行年							
所有者							
寸法	対 × コ × 高		カラー ×				
材質			モノクロ ×				
構造			スライド ×				
(付属品)			受入年月日				
著作権							
要・不要	処理		ネガ番号	解説			
連絡先	済(/)・未		写真番号				
要・不要	処理		スライド番号				
連絡先	済(/)・未		マイクロ番号				
備考	記入年月日		記入者				

筆者が資料調査のために使っている調査カード(前頁掲載)を配布した。さらなる改善の余地はあるが、図書館員には、こうしたものに書き込みを行いながら、自分の財産を増やしてほしい。

展示企画の立案

展示の実現にむけては、まず展示企画を立案する。日常的な調査・研究の中で「これぞ」という本に巡り合うと、これを核に据えた展示を企画したいという思いに駆られることもあるだろう。しかし、自分の思いの詰まった資料を並べているだけでは展示とはいえない。繰り返しになるが、展示は利用者に理解されるものでなければならない。「なぜこの資料がここに展示されているのか」という疑問を利用者に与えるものであってはならない。

国立博物館の常設展では、さまざまな資料によって「日本の歴史」が紹介されている。この資料はすべて「日本の歴史」という集合体の中にあるが、この中では、資料は時代ごとに分類されている。そして、展示は古い時代から新しい時代にむかって配列されている。こうしたあり方は、来館者に矛盾無く受け止められている。もしも、この中にヨーロッパの絵画が紛れ込んでいたり、江戸時代の後に平安時代のコーナーがあったりしたら、来館者はたちまち違和感を覚えるだろう。

ただし、本の場合には、博物館資料に比べれば、もう少し緩やかな分類が可能である。たとえば『しろいうさぎとくろいうさぎ』(ガス・ウィリアムズ文絵 松岡享子訳 福音館書店 1965)を展示したいと思った場合、果たしてこの本の中からいくつの切り口を引き出せるだろうか。調査研究の成果は、この切り口の数に反映する。数が多ければ多いほど、展示は多角的に広がり、さまざまな集合体に含まれる確率も高くなる。書誌事項から、作者のガス・ウィリアムズや訳者の松岡享子に焦点をあてれば、作品はこの他にも多数拾うことができる。出版年に注目して、昭和40年に出版された絵本を特集することや、福音館書店の世界傑作絵本シリーズを展示することもできる。さまざまなウサギの本の中にこの1冊を置くこともでき、結婚をテーマにした展示ならばこの本の最終ページを開いて見せることも可能である。

つまり展示とは、資料の集合体で成り立つものであり、資料のすべてを包括するテーマが展示趣旨で、集合体の中で資料をどう分類するかが

展示構成となる。

調査・研究といわれても、図書館の現場ではそのための時間も人手も潤沢にあるわけではない。こうした環境で展示資料の探索に有効なのが、データベースである。人間の頭で個々の資料が識別できるのはおよそ3,000件までといわれているが、図書館の蔵書はその数字を大きく上回る。展示資料を充実させたい場合、書庫に入ってやみくもに資料を吟味するなどということは不可能に近い。データベースに必要なキーワードを入力し、資料検索を行えば、ある程度のめぼしがつく。実際、ガス・ウィリアムズで検索すれば、画面にはかなりの数の蔵書が上がってくるはずである。ただし、最終的には、本を見てから展示するか否かを決めてほしい。実際に資料を手にとってみると、展示で紹介するに値しないものも多々あるからである。

企画書の作成

展示する資料がほぼ決まったら、いよいよ企画書を作成する。企画書は、上司を説得するためにはもっとも有効なものと考えてほしい。企画書を作成する際、展示趣旨や構成に迷いがあるようなら、その展示は時期尚早と考え、もう一度練り直して出直した方がよい。

展覧会の名称は、展示内容がわかるようなものが望ましい。凝りすぎて何を展示しているのかわからない展覧会のタイトルを見かけるが、展覧会の名称から展示される資料が想像できることは、来館への大きな動機付けになる。

また、展示内容が来館者にふさわしい内容になっているかどうか、展示を行うたびに分析する必要がある。博物館の入館者層は、児童・生徒・高齢者が多く、20代から50代の来館者はこれに比べれば少ない傾向がある。この傾向は入館者数のグラフからM字曲線などとも呼ばれる。しかし、図書館の児童書コーナーを利用する母親は、このグラフでいえばM字の底の部分にあたる世代である。児童書の展示と一口にいっても、どの世代を対象にして企画するのかによって、その内容は大きく変わってくるだろう。

企画書と同時に、展示シナリオも作成しておきたい。これは、ドラマでいえば、脚本のようなものになる。企画書段階では表現しきれなかった意図や課題、展示資料の一覧とともに、個々の展示物が持つメッセー

ジヤ展示物の相関関係などをまとめておく。これを配布することによって、館内での理解が得られ(問題点を指摘される場合もあるが) 外注業者が関わる場合はこちらの意向が伝えやすくなる。

筆者が作成した展示企画書をあげておくので、参考としていただければ幸いである。資料を借用する場合には、こうした企画書があれば、借用依頼がスムーズに行えるという利点もある。

特別展 本にえがかれた子どもたち - 町の子ども・村の子ども

【会 期】 平成 21 年 1 月 20 日(火) ~ 3 月 22 日(日)
休館日 = 毎週月曜日
開催時間 = 午前 9 時 ~ 午後 5 時

【会 場】 白根記念渋谷区郷土博物館・文学館 1 階特別展示室
(渋谷区東 4-9-1)
渋谷駅東口バスターミナル 54 番
都バス「日赤医療センター前」行
乗車、バス停「国学院大学前」下車、徒歩 2 分
TEL 03-3486-2791 FAX 03-3486-2793

【入 場 料】 一般 100 円、小中学生 50 円、60 歳以上無料
(10 名以上の団体割引あり、障害のある人と付き添いの人は無料)

【開催趣旨】 明治前期の日本では、殖産興業政策による都市の拡大が各地でみられ、都市の労働力として、多くの人々が農村から都市に移り住みました。渋谷もまた、日露戦争後の経済の発展と鉄道網の整備とが相まって、人口の拡大と住宅地の整備が促され、明治後期以降、急速に都市化しました。都市では基本的に職住は分離され、父親は仕事、母親は家事と育児を分担するという「家庭」が新たな生活スタイルとして確立してゆきます。幼児教育に目覚めた母親の求めに応じ、大正期には子

どもの本や雑誌の出版が全盛期を迎えます。本展では、こうした新たな児童文化を創造した渋谷にゆかりのある人びととその作品を中心に、当時出版された本や雑誌にえがかれた都市と農村の子どもの姿を紹介します。

流行の洋服を身につけてピアノに向かう町の子どもの姿がえられる雑誌には、同時に、田植えを手伝い、川や山を駆け回る村の子どもたちがえがかれています。そこには、都市生活者が希求した「ふるさと」があったといえるでしょう。



『赤い鳥』創刊号
大正7.7 赤い鳥社

【展示構成】

近代の新たな子ども観

- (1) 渋谷の都市化と「家庭」の誕生
- (2) 子どもと学校
- (3) 子どもと家庭
- (4) 新たなメディアとして登場した児童雑誌を中心に、明治から大戦までの子どもの本の歩みを紹介する。

えがかれた子どものくらし 町の子ども・村の子ども

岡本帰一、本田庄太郎、熊谷元一、川上四郎、深沢紅子らの挿絵から、町の子どもと村の子どもの生活を対比して紹介する。ここには、かつて存在した「さまざまな日本の姿」が発見できる。



「ピアノ」岡本帰一画
『コドモノクニ』 4巻11号 大正
14.10 東京社

挿絵を読む

- (1) 草双紙から絵本へ

- (2) 動物とおもちゃ
- (3) 甲子・上太郎(こうこ・じょうたろう)と凸坊・茶目子(でこぼ
う・ちゃめこ)
- (4) 年中行事



「甲子上太郎双六」『子供之友』3巻1号附録 大正5.1 北澤楽天 画

「甲子上太郎」は『子供之友』に連載されて大人気だったコーナー。甲子・乙子・丙子、上太郎・中太郎・下太郎の6人の子どもが登場し、子どもに「良い子」のあるべき姿を示した。

児童文化に寄与した渋谷ゆかりの人びと
明治から大正にかけ、子ども向けの作品を生み出した渋谷にゆかりのある人びととして、作家の国木田独歩、田山花袋、柳田国男、島木赤彦、高野辰之、与謝野鉄幹・晶子、鈴木三重吉、佐々木邦、志賀直哉、白石実三、竹久夢二、北原白秋、山田(今井)邦子、白鳥省吾、宇野浩二、吉田一穂、林芙美子、



与謝野晶子 『八つの夜』
大正3 実業之日本社
[復刻版](昭和49 ほるぷ出版)

大岡昇平が、画家には杉浦非水、岸田劉生、樺島勝一らがいる。また作曲家にも本居長世、中山晋平、草川信らがいる。かれらの多くは地方からの上京組であった。彼らが、都市と農村との間を揺れ動きながら生み出した作品を紹介する。



高野辰之は「故郷」「春の小川」「朧月夜」など、数多くの文部省唱歌を作詩した国文学者。資料は『尋常小学校唱歌』第三学年用（明治43 文部省）。

竹久夢二 『どんたく絵本2』 大正12
金子書店 [復刻版] (昭和60 ほるぷ出版)



草川信 「夕焼小焼」「どこかで春が」「汽車ポッポ」などの作曲で知られる。大正6年から渋谷の長谷戸小学校で唱歌を教えた。

資料の配置図と配布物の作成

企画書や展示シナリオに基づき、展示室の図面上に展示構成物を配置してみる。展示構成物は（Ａ）展示資料（資料・写真・映像・模型・装置など）（Ｂ）解説物（解説文・図表・イラスト・写真・音声など）（Ｃ）展示補助具（展示ケース・展示台・展示パネル・照明器具など）があげられる。この時、資料保護対策、導（動）線計画、視線計画、防災計画などを考慮する。導線（動線）は、説明パネルが横書きなら時計回り、縦書きなら反時計回りにすると利用者が動きやすい。

同時進行で、図録や目録を作る準備をする。業者に依頼する場合は、タイトル・内容・判型・体裁・ページ数・部数などを決め、ページごとの台割を作る。この時に掲載写真の大きさを決めておくと、余白のスペースがおおよそわかり、説明文の文字数を決める目安になる。図録は3校程度までは依頼したい。実際の作業では、初校はかなりの訂正を認めてもらえるが、それ以降は基本的に誤字の訂正程度と考えておきたい。

こうした配布物に資料写真を掲載する場合には、著作権の処理にも注意をはらわなければならない。

図書館では、展示記録を残すところがあまりないようだが、必ず残しておくべきである。これは事業の成果を証明するものであると同時に、レファレンスに役立つことが多い。毎年1月には、その年の干支の動物にちなんだ本を展示する図書館は多いが、これを蓄積しておけば、いずれは十二支展が開催できる。資料の説明文がブックトークに役立つこともあるので、できれば出展資料の書誌事項と資料の説明文は保存しておきたい。予算がない場合でも、目録は館内印刷で作成できる。

この時期は、さまざまな準備が集中する。時間切れのために未完成のまま開催することがないように、スケジュール表を作って予定を確認することが望ましい。

資料の設置

開館日目前になったら、資料のセッティングを行う。ここでは設置の際に気をつけることを思いつくままに羅列しておく。ケースや展示台には大きさの変えられない資料をはじめに置き、この余白にあわせて説明キャプションを作成する。調査をすればするほど、多くの資料を出したくなる気持ちになるが、利用者がどこを見たらよいかわからなくなるほ

ど並べるのは考えものである。適度な余裕は残しておきたい。

図書資料は基本的には平面的なので、27度ぐらいの傾斜がついた斜面台を使うと見やすくなる。ノドの部分が開かない本を展示する場合は、無理に開くと本が傷むので、自然に開く状態で展示用の透明テープで止め、開き具合に合わせた補助板を本の下に当ててこれを固定する。資料がめくれる場合はケサン を置くが、このときもケサンが資料を傷つけていないかどうかを確認する。

資料解説のパネルは資料の近くに置く。大型のパネルを壁面に設置する場合は、全体が見渡せる位置まで下がって、バランスの良い設置位置を確認する。パネル類を何枚か壁に並べて固定する時は、パネルの上辺を揃えるか、パネルの真ん中合わせにすると安定感が生まれる。

パネルやキャプションの文字は、可能な限り大きめにする。自分が思っている以上に、ケースに入ったパネルの文字は小さく見える。年配者からのクレームにはこれが多い。



手製の斜面台に資料をならべて講義する服部氏
ケサン(卦算): 本などの上においてページがめくれないように押さえる展示用品

展示環境は、資料の保護を考え、温度は 16～24、湿度は 55～60%の範囲が目安となる。照度は 50～200 ルクスの間で、資料によって使い分ける。

このほか、細かいことをあげれば展示室内で歩くときはほこりを立てない、資料を扱っている時は、炭化を考慮してマスクを着用、資料に傷をつける可能性がある指輪や時計ははずす、といったようなことがあげられる。

講座の中で現場の状況を聞いたところ、展示ケースを置いている児童書コーナーはないようである。利用者が手に取れる展示コーナーでは、何冊かの本を積み重ねて置くと、下の方にある本は手にとってもらえなくなる。紹介したい本が何冊もある場合は、資料を入れ替えながら展示した方が良い。

最後に、資料を借りる場合は、細心の注意が必要である。借用書には、運搬方法・保管場所・保管環境・展示場所・展示環境などを記入する。動産保険は、資料によっては加入できない場合があるので注意する。筆者は、展示を予定していた大正時代の子ども服に単独の保険がかけられなかったという苦い経験がある。

館内での展示周知

資料の設置も終わり、いよいよ利用者を迎えるという段階ですべきことがある。それは、館内に展示を周知することである。

展示は担当職員の仕事で、展示に関わらない職員にとっては他人事と見ている場合がある。利用者にとってみれば、館の職員なら誰でも展示に関することは質問できると思うだろう。展示内容どころか、展示をしていることすら知らない職員は、利用者に平然と「担当ではないからわからない」という。この言葉は、公共機関にとって恥ずべきことと自覚してほしい。

国際子ども図書館では、開催日の前日、職員一同向けのギャラリートークを行っていた。館長以下、多くの職員が参加し、展示担当者の話に耳を傾けてくれた。そして、足りない部分についての指摘もしてくれた。

展示担当者は、せっかくできあがったものに意見をされると、不快に感じることもあるかもしれない。しかし、その指摘に妥当性があれば、素直に耳を傾けるべきである。館内から先に指摘してもらえれば、利用

者に指摘される前に対応できる。筆者など、何度パネルの誤字を教えてもらったことだろう。

また、展示責任者は、館内で機会があるごとに展示の進捗状況を報告してほしい。展示は日常業務と掛け持ちで担当していることが多く、時間的にも肉体的にも無理をしている場合がある。展示担当職員がいかに苦勞しているかを周知してもらおうことが、彼らの気持ちに報いることである。

展示の成功は、どれだけ多くの人々が協力するかも大きな鍵になっている。誰しも自分が関わっている展示であれば、簡単に「わかりません」とは言わないし、積極的に展示を知ってもらおうとするものである。

展示を媒体とした事業展開

博物館では、展示の理解を深めるため、展覧会に伴う講演会・シンポジウム・ワークショップ・ギャラリートークなどの事業を企画する。住民の中には、展示開催中、何度も足を運んでくれる人もおり、これが新たな資料寄贈の縁となることもある。同じ意味で、アンケートは利用者のニーズを掴む大切な情報源なので必ず設置しておく。

3 課題 展示企画立案と配置の実践

第1回の講座は、上記の内容を講義形式で行い、最後に受講者全員に課題を出した。展示の実践の第一歩として、覗き型のケース2台分の展示を企画し、資料の配置図を作り、資料の説明文を作るという内容である。あまり細かな指示をしなかったため、課題がやりにくかったという受講者もあったかもしれないが、本講座では、とりあえず自分で考えてやってみることを重視したかった。

本節では、課題の結果を報告する。まず全体的な感想として、展示の企画案は、いずれもハイレベルな内容で、中にはすぐに展示が実現可能なものもあった。これには少なからず驚き、受講者の仕事と本に対する熱意には、思わず目頭が熱くなった。

ただし、展示資料の内容には、いささか物足りなさを感じた。まずは圧倒的に新しい資料が多かった。古い資料は廃棄されているかもしれないが、購入可能なロングセラーの良書がもっとあげられていて良いはずである。人気のある本の中にはたしかに見栄えのするものもあるが、

それだけでは大型書店の展示となんら差別化されていないことになる。

また、絵本に比べ、読み物が少なかったことにも不満が残る。絵本は、子どもが初めて出会う本であるという意味で大切だが、子どもたちは永遠に幼い子どものままでいるわけではない。児童サービス担当者は、成長してゆく子どもたちに、自らの体験から選び抜いた本を手渡すスペシャリストになってほしい。図書館全体の中でも専門分野となる児童サービス担当者は、それが実現可能な環境にある。

趣旨文や資料の説明文に関しては、主語が明確で、一文がだらだらと長い文章は見あたらず、文章がしっかりと書けていることに感心した。

欲をいえば、資料の説明文には、あらすじや展示担当者の感想は控えめにし、書誌事項をもう少し充実させてほしいことだろうか。図書館の展示は人と本が出会うことが第一の目的ではあるが、その先には読書に誘うという大きな目的もある。読まなくても内容がわかってしまうほど詳細なあらすじは、読書意欲を減退させる。利用者が本を借りたくなるような説明文が理想だが、そのためには、人の書いた資料紹介などに多数目をとおして、その理想に近づくしか方法はないように思われる。

さて、44名の受講者はどのような展示を企画したのか、興味のあるところである。次ページにはその一覧表をあげた。筆者の判断で、展示内容でいくつかに分類し、多かったテーマごとに順に並べている。これを見ると 作家、作品、郷土、生き物、時、親子、食べ物、民族、昔話、しかけ絵本の順となる。

分類 作家

作家はデータベースで作品を抽出できるため、比較的展示資料はまとまりやすい。しかし、作家にこだわる以上は、その作家についてかなりの調査が必要になる。作家の評価はもちろん確認しなければならない。外国の作家であれば、洋書にも目配りしなければならないだろう。著作権の処理も適切に行わなければならない。まとまりの良さそうな作家の展示にも、様々な難所が用意されている。

分類 作品

作品をテーマにした展示にも、これらの問題は共通する。読み継がれる作品は、装丁を変えて再版されることがある。『だれも知らない小さな

展示企画一覧表

企画案	展示タイトル・()内は仮タイトル	分類
1	マーガレット・ワイズ・ブラウン生誕100年	作家
2	2010年 国際アンデルセン賞は？	
3	(いわさきちひろの絵本)	
4	ヨゼフ・ウィルコンの絵本の世界	
5	かがくいひろしさん絵本展示	
6	吉村証子没後30周年記念 すべての子どもに科学を	
7	あべ弘土ワークショップ	
8	バートンの作品	
9	ヘンな人？ ステキな人！	作品
10	だるまさんのえほん	
11	色、いろいろなえほん	
12	ふしぎな冒険 -もうひとつの世界へ-	
13	日本のちびくろ・サンボたち-サンボ絵本はよみがえったか？-	
14	(『ちいさいおうち』と『小さな家シリーズ』)	
15	(板橋の田遊び)	
16	光が丘公園の野鳥 -カワセミみつけた-	郷土
17	あきる野市が誇る郷土の偉人たち	
18	この人も調布人！ 児童文学作家 小沢正さん	
19	ひばりが丘団地と図書館	
20	ホネホネホネ	生き物
21	国際生物多様性年	
22	虫に魅せられる！	
23	クモのふしぎ	
24	ミノムシ	
25	(ふゆのえほん)	時
26	冬を楽しく！	
27	(正月)	
28	新しい年を迎える季節の絵本 -トラ(寅)の絵本-	
29	絵本から覗く夜の世界	
30	よみきかせおすすめえほん	親子
31	おかあさんだいすき	
32	赤ちゃんとお母さんのあそびうた・わらべうた	
33	食べてみたいな！ 作ってみたいな！ -ものがたりに出てくるおいしいもの-	食べ物
34	いっしょにつくろうみんなであべよう おいしいものの本	
35	もっと食べたいな！ もっと知りたいな！ 食べもののこと	
36	シリーズ世界を知ろう！ -世界の東と西が交わる国トルコ-	民族
37	和のこころ-むかしからある日本の文化、さがしてみよう-	
38	ちきゅうはまるい -にほんのせかいのこどもたち-	
39	(桃太郎)	昔話
40	おだんごばん	
41	(おおきなかぶ)	
42	ふしぎな絵の国へようこそ！	しかけ
43	ひらいてみよう！ めくってみよう！ しかけ絵本	
44	えほんで絵！？さがし	

国』(佐藤さとる文 講談社)は、昭和34年(1959)の初版では、若菜珪が挿絵を担当している。現在では、この作品は村上勉の挿絵が定番になっているが、アイヌの民族衣装をまとったコロボックルが素朴な雰囲気醸し出す若菜珪の挿絵も作品世界を生き生きとしたものにしてしている。

あまんきみこの『車のいろは空のいろ』(ポプラ社)のシリーズは、成人してから読み返すと、さまざまな社会問題を内包していたことに気づく。たとえば、ダムに沈んだ村の祭りを扱った「きりの村」が書かれた当時は、日本各地でダム建設が行われていた時期に当たる。行政の意向によって、長年住み慣れた村を捨てなければならなかった人々の悲しみを作品化した作者のファンタジーには、鋭い社会批判があることは、子どもころにはわからなかった。こうした作者の意図を知ること、展示の紹介の仕方は大きく変わってくるはずである。

展示すると決めた作品に関しては、その本が児童書研究の中でどのような評価を得ているのかも必ず確認してほしい。本講座では、その確認方法がわからないという意見があがったので、児童書に関する基本的な参考文献一覧『子どもの本・子どもの読書・児童文化に関するレファレンスブックのご案内』(都立多摩図書館 2009年)を配布してもらった。本を調査することは、その本に価値をつけることだと前述したが、展示ではその価値を客観的に利用者に伝えなければならない。客観性を確認するためにこうした参考文献が存在する。

これは少し古い事例になるが、鬼が謝って桃太郎に許される結末をもつ桃太郎の絵本の出版が、児童書に関わる人々の中で物議をかもしたことがある。これをエセヒューマニズムと痛烈に批判した研究者もいた。何も知らずにこうした絵本を展示することに恐さを感じる担当者になってほしい。先人達たちが出版物に関して真剣に討議しながら、出版文化が形成されてきたことを次の世代に伝えてゆくのも図書館の仕事である。

分類 郷土

郷土を意識した展示企画があげられていたことは、喜ばしいことであった。地域博物館同様、公共図書館の一番の存在理由は、地域に関する資料が充実していることにある。こうした資料を紹介することで、他では見ることのできない展示も可能となる。

この展示が図書館にもたらすもっとも大きなものは、地域住民とのネ

ットワークの構築である。図書館への支援は、この人たちの協力なくしてはあり得ない。展示企画には、図書館そのものの展示もあげられているが、これを見た利用者の中には、自宅に埋もれていた写真を寄贈したいという人も出てくる可能性がある。そうなれば、地域博物館とも連携して、さらに大きな展示を開催することも可能である。地域住民は、自分たちが歩んだ歴史を展示で再確認し、元気を取り戻すこともある。これを手助けするのも行政機関の大きな役割である。

分類 生き物

生き物をテーマにした展示も注目される。昨今は子どもたちの科学離れが進んでいると聞く。人間と自然との関係は、この半世紀で驚くほど隔てられてしまった。企画一覧の中で取り上げられているクモやミノムシも、かつては身近な昆虫だったが、今では探さなければ見付けられない。かつて、樹液に集まるカブトムシを捕ることは、子どもにとっては夏休みの一大イベントだったが、今では親に買ってもらって手に入れる子どもが多いという。『ファール昆虫記』や『シートン動物記』、椋鳩十の動物物語などは、もっと子どもに勧めてほしい本である。実体験ができない環境では、本の中で人間とは異なる価値観をもつ生き物の存在を知ることが、地球環境について考え、科学に対する興味をもつ糸口になるのではなからうか。

分類 時

季節や時間をテーマにした展示は「時」という枠の中に分類した。講座の時期が正月を挟んでいたため、冬に関する本をテーマにしたものが多かった。図書館の児童室では、季節ごとにふさわしい本を入れ替えて紹介しているのをよく見かける。季節感は日本人のもつ文化意識の基層にあるもので、和歌や俳句はこうした感覚がなければ生まれなかった文学である。その意味で、四季折々の本を紹介するのは意義のあることだと思ふ。近年、日本の年中行事に関する出版物が多くなったが、これは年中行事がもつ本来の意味がわからなくなっていることの顕れであろう。正月は、現在では元旦をもって正月とするのが普通だが、新暦を採用する以前の日本では「立春」も正月としての意味を持った。季節の本の展示とともに、こうしたことも子どもたちに紹介してもらえたら……とい

うのは、筆者の個人的な希望である。

分類 親子

親子で楽しめる本は、幼児をもつ母親からの希望が多いことだろう。よみきかせ絵本の展示は、こうしたニーズに応えたものである。子どもにどんな本を読んでいいかわからないという母親は、母親自身が良い児童書に巡り会ってこなかったことも一因であろうか。児童サービス担当者には、さらに一步踏み込んで、母親たちに優れた読み物も紹介してほしい。図書館では昔話のテキストでお話を覚えた職員が、子どもたちに語りを聞かせるおはなし会を開催しているところもある。わらべうたやあそびうたなどの本は、展示とともにこうした場でも活用し、優れた子どもの言語創作能力をおおいに刺激してほしい。

分類 食べ物

食べ物の本は魅力的である。『赤毛のアン』（モンゴメリ作）に出てきたお菓子の数々は、筆者が少女だった頃は、未知のものだった。『ピッピ船にのる』（リンドグレーン作 大塚勇三訳 岩波書店）に出てくる「カンゾウあめ」にも憧れたものだが、実際に食べてみて想像とはあまりに違った味に驚いたことがある。『ぐりとぐら』のカステラを見ると、今でも生唾が出てくる。世田谷文学館で『ぐりとぐら』の展示が開催された時は、カステラを作るという関連事業が行われていた。こうした企画は参加者も期待するものだろう。

分類 民族

他民族を知る本との出会いは「違って当たり前」であることを知る良い機会である。民族が異なれば生活習慣も当然異なる。海外でその実態を見ることができると子どもは限られるが、本の中では自由に国境を越えることができる。国内でも、味噌や醤油の味は地域によってかなり差がある。味噌汁の味で夫婦喧嘩になったという笑い話も聞くが、自分にとっての常識は、他人からすれば非常識であることも知っておくべきである。民族や地域によって異なる文化があることを知り、おおらかで豊かな世界が存在することを理解した時、はじめて本当の意味のグローバル化が実現するだろう。

分類 昔話

昔話のもつ懐の深さは、本稿の冒頭で述べたとおりである。展示では、世界各地でそれぞれ伝承されてきた昔話を掘り下げることでもできるし、各地に共通する昔話を紹介しても面白い。ロシアの昔話『おおきなかぶ』（内田莉沙子再話 佐藤忠良画）は、福音館書店から出版され、現在も版を重ねている。ロシアで出版されている絵本と福音館の絵本の挿絵を見比べると、カブの色は日本では白く、ロシアでは黄色に描かれている。こうした違いを見つけるのも本を読む楽しさである。

北欧にはトロルという恐ろしい妖怪がいる。トーベ・ヤンソンの書いたムーミンもこのトロルの仲間であるが、子どもはなぜか妖怪のたぐいが大好きである。日本の鬼や座敷わらし、韓国のトッケビなど、各国で伝承されてきた妖怪を紹介することもできる。

分類 しかけ絵本

しかけ絵本の展示は、本を触って楽しむという展示方法が実現できそうである。紐を引くと一瞬のうちに絵が変わる本や飛び出す絵本は、実際にやってみないとその面白さはわからない。夏休みの体験学習では、簡単なだまし絵のようなものを作ったり、しかけ絵本を作ったりしても良い。たくさんの人の中から主人公を捜す絵本は、時を忘れて眺めてしまうが、利用者にご覧したものを作ってもらい、図書館で展示することもできそうである。

以上、分類ごとに思いつくままに述べてきた。個々の展示内容については、受講者それぞれにコメントを付して返却した。紙数の関係もありここではその一つ一つは取り上げないが、この中から企画案4点を紹介する。『『ちいさいおうち』と「小さな家シリーズ」展は、切り口にひとひねりあった。「この人も調布人！児童文学作家小沢正さん」は選んでいる資料が、絵本、物語、一般書、雑誌、同人誌とバラエティに富んでいた。「ホネホネホネ」展には説明文に勉強の跡がみられた。「ミノムシ」展は実際に展示したところ、利用者の反応を巻き起こした。また紹介したい企画案は選びきれないほどあったことをご理解いただきたい。

紙面の都合上、企画案には、割愛した部分があることをご了承下さい。

『ちいさいおうち』と『小さな家シリーズ』展（仮称）

趣旨：半年程前の「児童図書館専門研修」の「絵本」講座の中で、バートン『ちいさいおうち』、ワイルダー『小さな家シリーズ』の背景は同じ時代・文明であると知り、興味を惹かれたので、この2つの本をテーマにしたいと思います。

『ちいさいおうち』は自然豊かな土地で幸福であった ちいさいおうちの周囲の環境が時代の流れと文明化によって、刻々と変わります。都市化され、電車が走り、高層ビルが立ち並ぶと、人々までも慌しく足早になり、ちいさいおうちを振り返る人はいなくなります。ちいさいおうち はかつて過ごした自然の中での暮らしを夢見ます。暖かな太陽の日差し、緑の野原、夜の静けさ、星の瞬き、幸福な時間の記憶と都市化の中で取り残される ちいさいおうち の孤立感・閉塞感が対比されます。

『小さな家シリーズ』は1870年代から1880年代の北アメリカでの開拓生活を作者ローラの自伝的小説によって描いています。厳しく豊かな自然の中での暮らし、愛情に溢れた家族、西部開拓による大きな森や大草原への移転・移住の生活がインガルス一家の幼い娘ローラの視点から細やかに描写されています。狩猟、農牧、暮らしに関わる物すべて自分達の手で作り出す、丁寧で逞しい生活が現代の私達には新鮮なものとして感じられます。またこの物語は 大きな森 の生活から始まり、大草原への移動、インディアン・テリトリーからの政府によるアメリカ先住民への迫害、鉄道建設、町の誕生と町の人口の増加等、アメリカの西部開拓の歴史として読むことができます。

ローラの少女時代を扱った前半5冊は『インガルス一家の物語シリーズ』として福音館書店より出版され、青春時代を扱った後半5冊は『ローラ物語シリーズ』として岩波書店より出版されています。出版社、シリーズ名が異なり、書名が「大草原の小さな家」「大草原の小さな町」と似ていることで混乱を招き、この物語を気軽に手に取ることを児童の利用者から遠ざけているようにも思います。私自身も恥ずかしながら未読だった際

に利用者から質問され冷や汗をかいた経験があります。シリーズを巻順に並べて展示し、一冊ごとに説明キャプションをつけることで、利用者にわかりやすく展示したいと思います。

『ちいさいおうち』『小さな家シリーズ』の共通項として、自然の中で暮らした時間が幸福な時間の記憶につながっていること、その対比として文明化された町での生活が描かれています。2つの本はそれぞれベストセラーで有名ですが、同じ時代のアメリカの開拓が描かれているという点で双方を関連付けて読むと、それぞれの視点を考える手助けになります。

また『ちいさいおうち』のバージニア・リー・バートンの優しい豊かな色彩と、『小さな家シリーズ』の挿絵画家ガス・ウィリアムズによる繊細で愛らしい絵も、この物語の魅力の大きな部分を担っていると思うので、表紙・挿絵から物語の雰囲気伝わり、利用者に関心を持ってもらえればと思います。

展示資料

バージニア・リー・バートン『ちいさいおうち』 岩波書店

岩波の子どもの本の小さい判と、現在の大きい判型

ローラ・インガルス・ワイルダー

『大きな森の小さな家』(インガルス一家の物語1) 恩地三保子訳
福音館書店

『大草原の小さな家』(インガルス一家の物語2)

『プラム・クリークの土手で』(インガルス一家の物語3)

『シルバー・レイクの岸辺で』(インガルス一家の物語4)

『農場の少年』(インガルス一家の物語5)

それぞれハードカバー版と文庫版

『長い冬』(ローラ物語1) 谷口由美子訳 岩波書店

『大草原の小さな町』(ローラ物語2)

『この楽しい日々』(ローラ物語3)

『はじめの四年間』(ローラ物語4)

『わが家への道 ローラの旅日記』(ローラ物語5)

『長い冬』1962年 鈴木哲子訳 岩波少年少女文学全集 17

町田市立図書館 田中幸枝

「この人も調布人！児童文学作家小沢正さん」展（仮称）

小沢正（1937～2008）

東京生まれ。早稲田大学卒業。在学中早大童話会で創作をはじめ、山本護久らと幼年童話研究誌「ぷう」創刊。1962年チャイルド本社に入社するが翌年の3月には退社。この頃「ぷう」は自然消滅。その後も童話創作を続け『目をさませトラゴロウ』で1965年度NHK児童文学奨励賞を受賞。「童話自身による童話の否定」と自身が述べているように、独創的な発想とユーモア、ストーリー性で幼年文学に衝撃を与えた。

その後も多くの児童文学を創作し続ける。1977年には調布市小島町に移転し、その後調布市で過ごす。調布市の図書館を利用する姿も見られた。2008年死去。2008年7月に「小沢正さんを偲ぶ会」が文化会館たづくり12階大会議場で行われた。児童文学に関わる多くの著名人が集まり小沢さんを偲んだ。

（参考『さよなら小沢正さん』『日本の童話名作選 戦後篇』講談社文芸文庫編 講談社）

対象：調布市民、子どもに本を手渡す親世代を対象年齢とした。

目的：小沢正氏を知ってもらふ。小沢氏の本を紹介して、貸出につなげる。

展示資料

『ほしからきたうま』 小沢正作 岩村和朗え 小峰書店 1982.3
小沢正氏初の単行本

『さよなら小沢正さん』 「小沢正さんを偲ぶ会」実行委員会編 「小沢正さんを偲ぶ会」実行委員会 2008.7

早稲田大学の学生時代に早大童話会に入会し、会員と共に創刊した幼年童話研究同人誌

『目をさませトラゴロウ』小沢正童話 井上洋介挿絵 理論社 1981.8

『ゆかしたのたから』 小沢正作 佐々木マキ絵 あかね書房 1977.12
同年調布市小島町2丁目に移転。柴崎芙紗子と暮らしはじめる。新日本文学に入会。

『童話の方法』 小沢正著 青弓社 1985.6

『変身 改版』 フランツ・カフカ著 中井正文訳 角川書店 1993.7

14歳の頃担任の先生に薦められて読んだ本であると自筆年譜に記述あり。

多くの著名な絵本画家と本を創作している ~

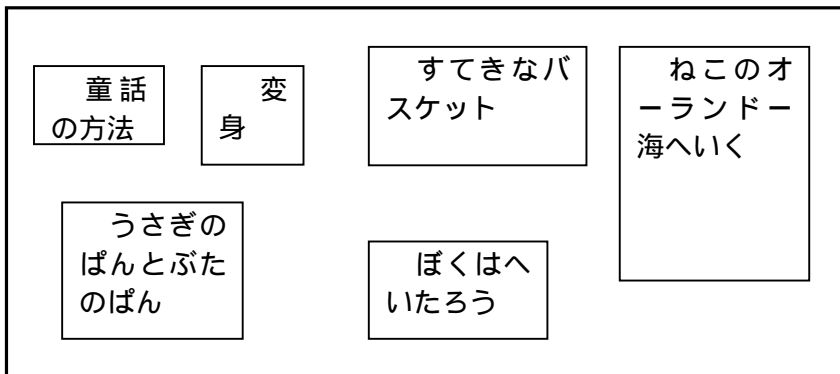
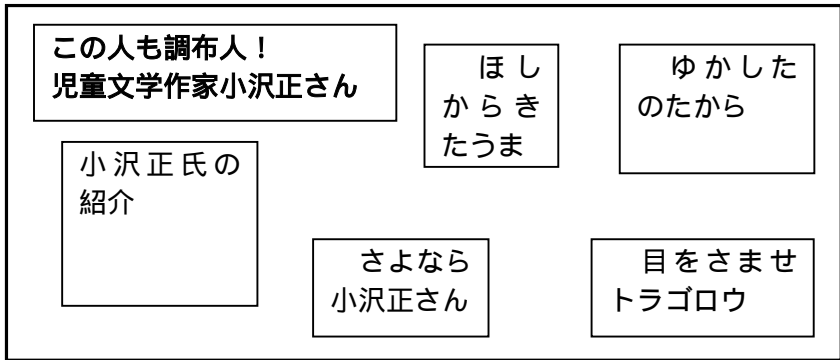
『すてきなバスケット』小沢正作 佐々木マキ画 福音館書店 1994.1

『うさぎのぱんとぶたのぱん』小沢正作 西川おさむ絵 小峰書店 1992.3

『ぼくはへいたろう - 「稲生物怪録」より - 』小沢正文 宇野亜喜良 絵 ビリケン出版 2002.8

『ねこのオーランド - 海へいく』 キャスリーン・ヘイル作・画 小沢正訳 童話館出版 1997.7 (訳者の仕事もしていることを紹介したいので展示本にした)

展示配置図



調布市立図書館 吉江夏子

「ホネホネホネ」展（仮称）

趣旨：骨は体を支えるものではあるが、目にとらえることは難しい。骨が白日の下、さらされるのは死んだあとであり、日本では葬儀の際のお骨を拾うときであることが多い。そのためか骨、特に人間の骸骨は死と結びついて考えられている。例えば西洋における死神の描写。大鎌を持った黒衣の骸骨やメキシコのハロウィン。日本でも「歌い骸骨」に代表されるように、骸骨は死者の魂が残った姿として連想されることもある。このたびの展示では骸骨に焦点を当て、生物学的なものから伝承的、はたまた現代における創作作品の中から骨へのイメージを探っていこうとするものである。

展示資料

『絵で見る人体大地図』 ジュリアノ・フォルリナ、スティーブ・パーカー著 同朋舎出版 1993

『ホネホネたんけんたい』 西澤真樹子監修・解説 大西成明写真 松田素子文 アリス館 2008

『ほね』 堀内誠一著 福音館書店 1991

『がいこつ』 谷川俊太郎著 和田誠絵 教育画劇 2005

『日本の絵巻7 飢餓草紙・地獄草紙・病草紙・九相詩絵巻』 小松茂美編 中央公論社 1987

解説 これは小松茂美蔵の九相詩絵巻。蘇東坡九相詩の写しであるが同じようなものとして、卒塔婆小町の方が有名かもしれない。

『21世紀によむ日本の古典8 日本霊異記 宇治拾遺物語』 ポプラ社 2001

『ちいさいちいさいおばあさん イギリスの昔話』 ポール・ガルドン絵 はるみこうへい訳 童話館出版 2001

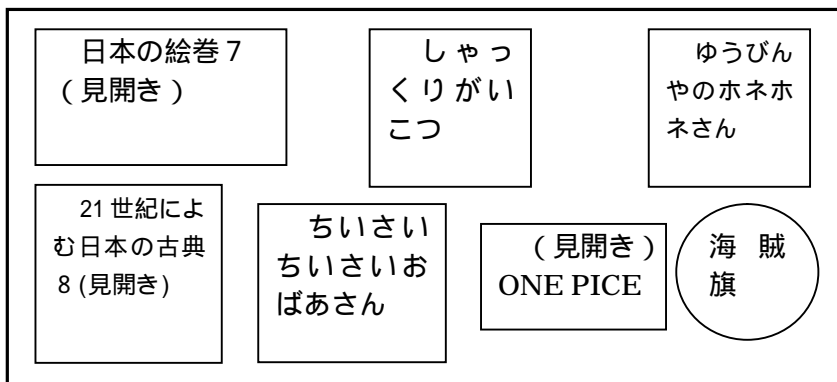
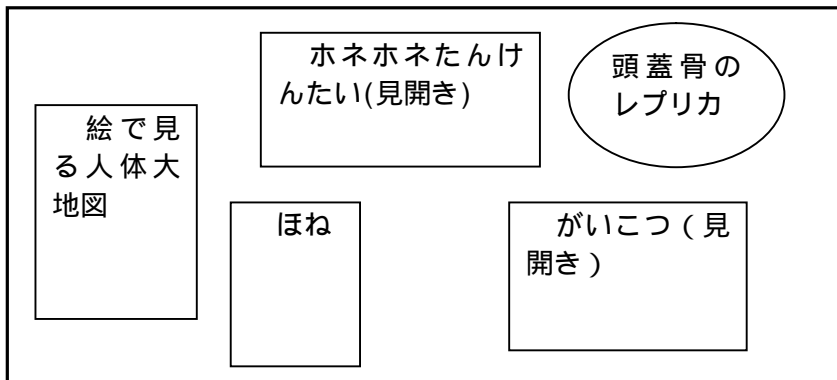
解説 ちいさいちいさいおばあさんはいろんなものをお墓から拾ってきます。はてはスープのだしをとるために骨まで拾ってきてしまいます。その後おばあさんの身に起こる恐ろしいことは……。

『しゃっくりがいこつ』 マージェリー・カイラー作 S.D. シンドラー絵 黒宮純子訳 セーラー出版 2004

『ゆうびんやさんのホネホネさん』 にしむらあつこ作・絵 福音館書店 2003

『ONE PICE 50巻』 尾田栄一郎著 集英社 2008

展示配置図



葛飾区立鎌倉図書館 山川範子

「ミノムシ」展（仮称）

趣旨： ある秋の日、保育園勤務の友人に「子供たちにミノムシを見せてやりたいが、どこかにいないか」という相談を受ける。快諾して探してみるが、見つからない。ということは、最近の子供たちはミノムシを見たことがないということだ。そこで、児童向けの「ミノムシ」の展示をすることにした。内容はミノムシの絵本、紙芝居、科学の本と、本物のミノムシの展示をする。子供たちには、実物を見ながら図書にあたり、ミノムシの正体を暴いてほしいし、このことが科学の本を読むきっかけになればと思う。また、ミノムシは1990年代後半から、外来種オオミノガヤドリバエがミノムシに寄生するようになり、激減している。この展示を通して、身近なところでも自然が変化していることを知ってほしい。

説明： みなさん、ミノムシを知っている？ 見たことある？

木の葉や枝を口から出す糸でからめて袋を作り、その中に住んでいるガの幼虫。昔の人が使っていたレインコートの「蓑」に似ているから、この名前になりました。

まずは、実物を見てください。それからミノムシの一生を、絵本「みのむしがとんだ」でじっくり観察してください。どんなふうにおうちを作っているか、葉っぱの食べ方やぶら下がり方など、見れば見るほどおもしろい！

そして、ミノムシを探してみてください。見つけたら、もっと詳しい本で調べてみてね。そのうちきみは、ミノムシ博士になること間違いなし！

追記： 昨年秋、東村山市立中央図書館では実際にミノムシをカウンターに置き、その横に絵本を展示しました。子供たちは「これなあに？」と必ずといていいほど、ケースを手に取りました。そして、大人は「最近見ないなあ」といって子供と一緒に絵本を借りていってくれました。おかげで中央図書館の児童のミノムシ関係の本は、常に貸し出されている状態でした。実物と本の間を行ったりきたりしている子供たちの気持ちや視線を思うと、児童図書の展示冥利に尽きます。

展示資料

『みのむしとんだ』 得田之久作 童心社 1978

『みのむし ちゃみののがのくらし』 甲斐信枝作 福音館書店 1979

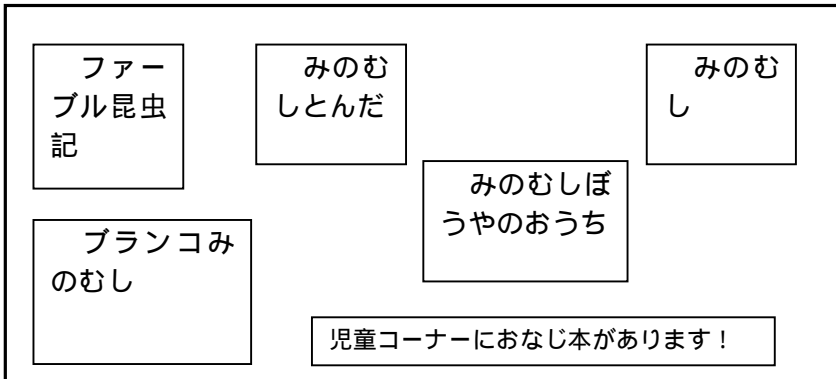
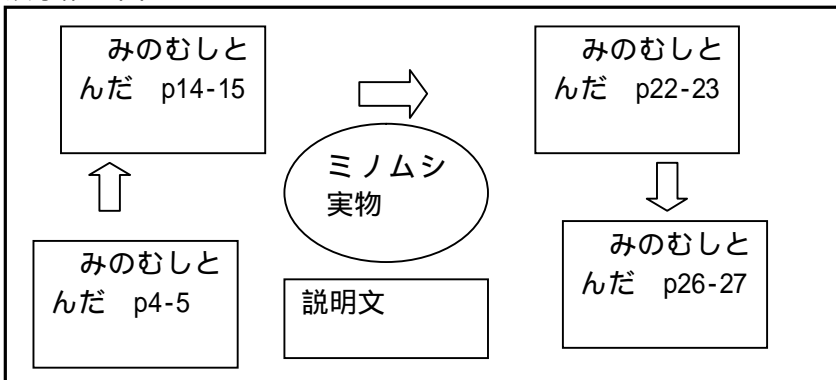
『みのむしぼうやのおうち』 いとうせつこ作 福音館書店 2001

『ブランコみのむし』(紙芝居) 高家博成脚本 かみやしん画 童心社 1999

『幼年版ファーブル昆虫記5 もんしろちょうとみのむしの話』

ファーブル著 小林清之介文 あすなる書房 1993

展示配置図



東村山市立中央図書館 奥田美文

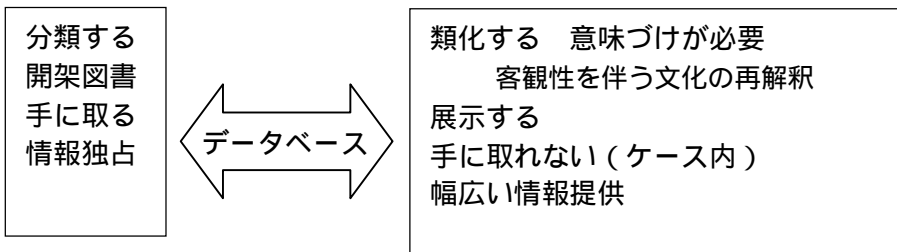
おわりに

ここまで、講座の内容を振り返りながら、図書館における資料の展示についてまとめてきた。

筆者は、これまで児童書の展示を企画し、開催してきたが、一連の展示活動をまとめるという作業は初めてのことであった。この作業の中で、展示に関して自分なりの新たな発見があった。

図書館では日常的に本を分類して配架することによって、利用者が求める本を手にとることができる。この意味では、図書の開架も実は展示なのではないかと再認識した。図書館の利用者全員が、インターネットで蔵書検索をし、この本と決めて図書館を訪れているわけではない。配架という展示によって、本を探す喜びを得る利用者もいることだろう。そこにはデータベースでは見えない世界を利用者に提示することができる。しかしこの段階においては、本が発信する情報は、個人の利用者にとどまっている。

図書館で展示をする場合、ある意味づけによって資料を類化する（まとめる）作業が必要になる。つまり、日常的な分類作業とは逆の作業が必要となるが、この展示によって、本の情報はより多くの利用者に提供できるという図書館の新たな機能が生まれる。図書館の展示の目的は究極的にいえばこれに尽きる。これを図式化すると下図ようになる。



資料を類化するための意味付けは、文化の再解釈を図書館員が行うことによってなされるのではなからうか。たとえば文芸評論は、文学を文芸評論家が再解釈して提示することに他ならない。図書館の展示では、幅広い視野と知識をもった図書館員が資料を再解釈して利用者に提示することである。そこは、図書館員の力量が試される場であると同時に、

自己実現の場でもあると考えてほしい。

司書とは、書を司ると書く。一冊の本は、作家があり、画家があり、編集があり、オペレーターがあり、デザインがあり、印刷所があり、本屋があり……多くの人に関わって誕生し、出版文化が連綿と育まれてきた。司書が、こうした出版文化を担っているという矜持を持っていれば、売れている本を優先的に購入したり、古くなった本は機械的に廃棄したりという結果は生まれえないはずである。大型貸本屋と揶揄されない価値はそこにある。

一人でも多くの受講者が、児童書のスペシャリストとして図書館の中で頼られる存在になることを願ってやまない。これが、講座を担当した筆者の偽りなき本音である。

(はっとり ひろみ)

<参考文献>

- 『単位空間』 日本建築学会 1980
- 『図書館・博物館の設計』 栗原嘉一郎他 新建築学大系編集委員会編 彰国社 1983
- 『博物館を考える』 水藤 真 山川出版社 1988
- 『博物館実習』 玉川学園教育博物館 1995
- 『ミュージアム・マネージメント』 大堀 哲編 東京堂出版 1996
- 『学芸員の理論と実践』 段木一行 雄山閣 1997
- 『博物館概論』 鈴木真理他 樹村社 1999
- 『博物館学概論』 加藤有次他 雄山閣 1999
- 『博物館展示法』 加藤有次他 雄山閣 1999

ほか

ぶらたなす第 59 号

発行 東京都立多摩図書館児童青少年資料係

〒190-8543 東京都立川市錦町 6-3-1

電話 042-524-6428(ダイヤルイン)

都立図書館ホ - ムペ - ジのアドレス

<http://www.library.metro.tokyo.jp/>

発行日 平成 22 年 3 月 30 日